

2020. 1. 26

畑 啓之

価値ある書籍も利用されなければただのゴミ？ 専門的すぎる書籍は特にゴミ??

個人図書でも冊数が増えてくるとどうにも仕様がなくなる。家族からは何とかしてと言われる。本の増加とともに住むところがなくなっていくのだから仕方がない。私もかなりの冊数を「自炊」してPDFファイルとしたが、それでもまだ追い付いていない。どこかの段階で、必要なものと緊急性のないものに仕分けして処分することになるのだろう。

と言っても個人の持っている書籍数などは知れている。数えたわけではないが、せいぜい5千冊までだろう。それに対して、このニュースの図書は25万冊と大変である。専門性が高い図書はその単価が高く希少性も高いが、それとは正反対に読者が限られる。この図書館で長年司書として働いてきた中西真也さんの言うとおり、これらの図書には価値がある。

好ましくは、すべてPDF化し一般公開することである。それには労力と費用が掛かる。また、それを有効利用してくれるかどうかも未知数である。

長年にわたり、Googleが世界の全ての書籍をPDF化する計画をたて、精力的にそれを推し進めてきた。その成果はGoogleBooksに反映されている。Googleは日本の企業ではないが、こちらにお願いしてPDF化してもらい、一般公開するのも一つの手ではないだろうか。図書、特に希少性の高い図書は世界の共有財産である。

GoogleBooks <https://books.google.co.jp/>

書籍の全文が登録された世界最大級の包括的なインデックスを検索できます。

神戸新聞 NEXT 2020/1/22

大学寄贈の専門書どうする… 25万冊眠ったまま

使い道はありませんかー。兵庫県尼崎市が昨秋にオープンさせた市立施設「アマブラリ」（同市若王寺2）で書籍類約25万冊が眠ったままになっている。2015年に廃止された旧聖トマス大学から、土地と建物ごと同市が無償で譲り受けた旧大学図書館の蔵書だが、一般への貸し出しに向かない専門書が多い上に、蔵書管理には多額の市税と要員を投じる必要がある。保管する市立中央図書館は「お手上げ」の状態だ。（大盛周平）

書庫には、日本の学術書や宗教書、海外文学の原書が収められ、中には300年以上前の洋書もある。同大図書館の司書だった同市立中央図書館臨時職員、中西真也さん（65）は「哲学や宗教学の本が体系的にそろっているのが特徴。ここの本があれば論文が書けます」

と説明する。

管理を委ねられた市立中央図書館の担当者は、その中から一般に貸し出せそうな約2400冊を選び出し、市内2カ所の図書館で再利用。小中学校にも約3100冊を配布した。古くなった4500冊余りは処分したが、25万冊近い書籍は手付かずのまま残った。

■生かされる方法考えて／笹倉剛・神戸親和女子大文学部教授（図書館学）の話

蔵書は一冊一冊が財産で、特に古い文学系書籍は価値のある場合がある。知的財産をどう取り扱うのか、市が詰めておかなければいけなかった。ただ大学も含め、どの図書館も書庫がいっぱいで、本の引き取り手を探すのは難しい。湿度を保つなど管理も大変だ。責任の所在を明らかにし、有識者を集めるなどして本が生かされる方法を考える必要がある。

神戸新聞 2020.1.22

## 尼崎市開設の「アマブラリ」

# 蔵書25万冊眠ったまま

### 旧聖トマス大寄贈の学術書、宗教書、洋書

使道はありませんか。尼崎市が昨秋にオープンさせた市立施設「アマブラリ」(同市若王子寺2)で書籍類約25万冊が眠ったままになっている。2015年に廃止された旧聖トマス大学から、土地と建物ごと同市が無償で譲り受けた旧大学図書館の蔵書だが、一般への貸し出しに向かない専門書が多い上に、蔵書管理には多額の市税と要員を投じる必要がある。保管する市立中央図書館は「お手上げ」の状態だ。(大盛周平)

アマブラリは旧聖トマス大の4階建て図書棟を改修し、昨年10月に開設された。学習室や図書コーナーなどを備えているが、1階から4階まで連なる立ち入り禁止の閉架書庫には、同大の旧蔵書約24万8千冊が並び、閉架書庫の延べ床面積は約500平方メートル。施設の約6分の1を占める。

書庫には、日本の学術書や宗教書、海外文学の原書が取められ、中には30年以上前の洋書もある。同大図書館の司書だった同市立中央図書館臨時職員、中西貞也さん(65)は「哲学や宗教学の本が体系的にそろっているのが特徴。この本が旧大図書館の25万冊近い蔵書が並ぶ閉架書庫。外部に知られることなく保管されている。いずれも尼崎市若王子寺2(撮影・風斗雅博)」

## 貸し出し不向き、整理にコスト

れば論文が書けます」と説明する。カトリック系4年制大学だった旧聖トマス大は「英知大学」として1963(昭和38)年に開校。07年に改称され、学生数の減少などから15年に廃止された。学校法人は土地、建物を尼崎市に寄贈し、同市は跡地一帯を利用して青少年の支援施設を整備した。だが、当時の蔵書約25万8千冊は活用方法が決まらなかった。

管理を委ねられた市立中央図書館の担当者は、その中から一般に貸し出しそうな約2400冊を選び出し、市内2カ所の図書館で再利用。小中学校にも約3100冊を配布した。古くなった4500冊余りは処分したが、25万冊近い書籍は手付かずのまま残った。

未整理の書籍は、市立中央図書館と北図書館などの全蔵書約75万5400冊に対し、3割を超す分量となる。担当者は蔵書の統合も考えたが、市の蔵書システムに登録するには、本のラミネート加工やバーコードの貼付などに1冊200〜300円程度の費用がかかる。また、売却するにも専門性が高い書籍の価値が判断できず難しいという。

現在は、希望があれば図書館職員が書庫を案内し、蔵書の一時的な貸し出しなどに対応している。同市立中央図書館の安福眞理子館長は、二つの市立図書館の一角に専用の本棚を置ければ「理想的」とするが、「その選別に果たして何年かかるか」。市民の税金をこまめに投入するのと同じ問題もある」と話す。

生かされる方法考えて  
笹倉剛・神戸親和女子大文学部教授(図書館学)の話  
蔵書は一冊一冊が財産で、特に古い文学系書籍は価値のある場合がある。知的財産をどう取り扱うのか、市が詰めておかなければいけなかった。ただ大学も含め、どの図書館も書庫がいっぱいで、本の引き取り手を探すのは難しい。湿度を保つなど管理も大変だ。責任の所在を明らかにし、有識者を集めるなどして本が生かされる方法を考える必要がある。